

「エッセイ」を書いてみよう

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

- ①吉田兼好の「徒然草」(つれづれぐさ)、清少納言「枕草子」(まくらのそうし)、モンテーニュの「随想録」(ずいそうろく)、パスカルの「パンセ」など、「エッセイ」とよばれる作者の名前や作品の名前をお聴きになったこともあると思います。
- ②せっかくの夏休みですので、あまり堅苦しく考えずに、心に浮かんだことを、どんどん「エッセイ」という形で表現してみましょう。そこで、今日は「エッセイ」の書き方を皆様とご一緒に考えてみましょう。

2. エッセイを書いてみよう

- ①「エッセイ」は「物語」(小説)とは全く違います。「小説」は「フィクション」といって、時代や背景を考えながら主人公や登場人物、自分で物語をつくりあげるものです。本当のことを書く必要はありません。
- ②しかし、「エッセイ」は自分で見たこと、聴いたこと、感じたことを自分なりに深くほりさげて、できるだけ簡単、明瞭な形で表現するものです。見たり聴いたりしていないことや、感じてもないことを書いてよいものではありません。「小説」や「物語」とは、その点で全く異なります。この点だけくれぐれも注意してください。「短い文章」だから「エッセイ」だと勘違いしている方もおられますが、事実と反する内容や、心に思っていないことを書くのは「短編小説」とか、最近のことばでは「ショート・ショート」と呼び、「エッセイ」とは違います。まして、「笑い話」は「エッセイ」とは全く違います。
- ③では、どんな風に「エッセイ」を書いたらよいか。全く思いあたらない方は、思い切って「エッセイ」の古典中の古典である吉田兼好の「徒然草」や清少納言の「枕草子」、モンテーニュの「随想録」(エッセイ)やパスカルの「パンセ」などを図書館や本屋さんで探し求め、借りたり、購入したりして目の前に置き、手にとり、木陰などで1～2ページだけでもいいですからゆっくりと読んでみて下さい。そうか、自分の目で見たり、耳にしたこと、感じたことを自分なりによく考え、それをできるだけ簡単、明瞭に書き表せばいいのだな、ということがおわかりになると思います。

④そうです。エッセイを書くには、よく見たり、よく人のお話を聴いたり、心の底から感動したりすることが大切です。それを自分なりに、深く考え、ある程度考えがまとまったら、ダラダラとした形ではなく、できるだけ簡単、明瞭にわかりやすくスラスラと書き残していく。これが「エッセイ」かと思います。

3. おわりに

①このように「エッセイ」を書くことは「深くものごとを考えること」、つまり、あるがままの形で自分以外の他人の存在を認めながらも「自分の内面を磨くこと」、「知性を磨くこと」につながります。

②前回の放送で「質の高い時間」つまり「クオリティ・タイム」を、親は子どもの教育のためにもつことの重要性をお話させて頂きました。

③1日何分でも、いや1週間に1時間でも、1か月に1時間でも「質の高い時間」(クオリティ・タイム)を過ごしながらか、そこで見たり、聴いたり、感じたことを、深く深く考え、簡単、明瞭に自分の言葉で「エッセイ」という形で気軽に書き残すことをおすすめします。

④コンピュータ入力でもいいですが、少しお小遣いを奮発してしっかりした装丁のお気に入りの「ノート」に書き記すと、「人生の宝物」ともなります。